

研究タイトル：

アメリカ経済学史



氏名：	加藤 健 / Ken KATO	E-mail：	kenkato@toyota-ct.ac.jp
職名：	准教授	学位：	博士(経済学)(横浜国立大学)
所属学会・協会：	経済学史学会, 社会政策学会, アメリカ経済思想史研究会		

キーワード：アメリカ制度学派, J.R.コモンズ, 意思主義, 制度進化, T.S.マクマホン, 消費

技術相談
提供可能技術：
・アメリカ経済社会の歴史に関する出前授業や講演

研究内容： アメリカ制度学派の研究

19世紀末以来のアメリカ経済思想においては、ブリテンの古典派経済学を保護主義的経済の育成という東部アメリカ的基盤に適合する形で変形させた南北戦争前後までとは異なって、およそ二通りの新たな傾向が登場しました。それは、[1]ヨーロッパにおけるいわゆる限界革命に対応し、生産ファクターに焦点を当てた J.B.クラークらの限界生産力理論の傾向と、[2]この限界理論のアプローチに対して批判的な態度を示し、制度的もしくは文化的な要因が持っている重要性に力点を置いた傾向の二つです。とりわけ[2]の傾向は、1910年代終わりのアメリカ経済学会での議論を契機に、「制度学派」と呼ばれるようになりました。

■コモンズの意思主義的な議論の特質と制度進化の意味

J.R.コモンズ(John R. Commons, 1862-1945)は、ヴェブレン、ミッチェルと並んで制度学派生成期の代表的思想家の一人であり、アメリカ労働運動史研究(ウィスコンシン学派)の創設者として知られています。近年、歴史的・文化的に蓄積された「制度」が持つ積極的な意義に着目するアメリカ制度学派研究が登場していますが、法形成の視点を濃厚に持つコモンズの経済理論と政策構想にどのような関連があったのか、また、さまざまな資格と権限を持って実際の市場取引に参加する人間の意思的な側面を重視して分析するコモンズの意思主義的な理論がどのような特質を持っていたのか、という観点からの研究は国内外においてもまだ広がりがありません。本研究の目的は、19世紀末以降のアメリカ経済思想における人間の行動モデルの描き方に対するコモンズ的な意思主義の特質、および、法もしくはルール発見を含むコモンズ的な制度進化の意味を解き明かすことにあります。とりわけ、欲望充足を適えるパターンを能動的に選び取っていく「意思」を備えた主体の内実について、当時の社会心理学や行動主義の心理学そして法社会学など多方面の分野との関わりの中で明らかにしていきます。

■マクマホンの「生活水準」の社会的側面および歴史的・分析的な解釈

T.S.マクマホン(Theresa S. McMahon, 1878-1961)は、1909年にウィスコンシン大学にて博士号(社会学)を取得し、1937年までワシントン大学で教鞭を執った社会学者として知られる人物です。当時の主流派経済学は、経済学と社会学を分離し、あくまでも「生産」領域に限定した分析が中心であったのに対して、マクマホンは、経済学に社会的要素を取り入れることで、「生産」領域よりも「社会的・経済的な消費」という視点を重視しました。ヴェブレン『有閑階級の理論』(1899年)における人間の張り合おうとする性質(emulation)に関する消費論をベースに置きながら、マクマホンは、第1次世界大戦後の1920年代の繁栄したアメリカ社会の中で人々が「真似をする(模倣する)行動」に着目しました。人間は消費活動を通して「経済的」欲望のみを満足させているわけではありません。マクマホンが取り上げた、コミュニティの行為基準により判断された個人的な是認(社会的反応)の中での「社会的」欲望の充足の意味について分析を進めています。

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	